



カタカナ語

佐々木 忠夫 (宮城・高校)

日本人は新しいものを導入するときにカタカナ語をよく使うが、それによって意味が不鮮明になることがよくある。例えば、最近はやりの「アクティブ・ラーニング」である。

アクティブと active には、受け取るイメージに差があるようだ。アクティブを辞書で引くと、「アクティブな若者層」と例文がある。生き生きと動き回っている若者を想像するのではないだろうか。実際職員室で聞くと、「活動的」という答える人が多かった。これがラーニングと一緒になれば、生徒が教室の中で動き回っている様子を想像してしまうことにならないだろうか。

active はどうだろう。辞書で引けば、「活動的な・活発な」と同時に「能動的な・積極的な」である。active learning はただ生徒が教室で活動している様子だけでなく、積極的に授業に取り組むさまが見えてくる。教室で生徒が動き回ってなくても、積極的に学習に取り組んでいる姿を我々教師なら、何度も見てきた。それも active learning なのである。脳が active なのだから。

反対に、教室を動き回っているが、型にはめられた活動だけをわけもわからずしている研究授業も何度も見てきた。昨年も隣の高校で、英語の基本の語順である「主語+動詞+目的語」さえもわからず、写真を見て、その内容をみんなの前で発表する授業を見てきた。

「アクティブ・ラーニング」によって、今までやられてきた「英会話ごっこ」の授業を正当化しようとしているのかもしれない。パターンをわけもわからずに暗記させられ、会話する授業。暗記が苦手な生徒にとっては苦痛以外の何物でもなく、英語嫌いになった生徒が私の学校にはいっぱいいる。

我々英語教師はカタカナ語の戦略に反論する力と実践力を持ち、本当の意味での active learning を作る必要がある。